

# 博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報

**第五回特別展**  
(観覧無料)  
**飯田蛇笏俳句写真展**  
期間 平成十二年八月十二日(土)  
～ 九月十日(日)

**第四回特別展**  
(観覧無料)  
**下部写友会作品展&  
懐しのカメラ展**  
期間 平成十二年七月十日(月)  
～ 八月六日(日)

## 第4回特別展・第5回特別展開催

来たる7月10日から9月10日にわたり、特別展を2つ開催します。

第4回特別展は、「下部写友会作品展&懐しのカメラ展」というテーマのもと、下部写友会の協力をいただき、会員の日常創作活動での見事な作品20点をお借りし展示するものです。同時に、懐しいカメラなど50点も展示します。

第5回特別展は、「飯田蛇笏俳句写真展」というテーマのもと、山梨県立文学館が開催した飯田蛇笏が詠んだ俳句をテーマにした「写真展」の入賞作品47点と、飯田蛇笏の遺品等を同館からお借りして展示するものです。

どちらも素晴らしい作品ばかりです。  
どうぞ、この機会にご覧ください。

# 「ハンズ・オン」と「博物館」

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷口 一 夫

「ハンズ・オン」耳慣れない言葉が出てきました。しかし、博物館関係者の中では、一般化しつつある言葉です。「手にとって」といいますか、見るだけでなく「実践的に学ぶ」ということで、欧米では日常語として使われています。展示物をケース越しに見ることでなく「実際にさわって」学習する、ということから始まりましたが、今や、もっと多彩に進化してまいりました。

全国各地の博物館は、大きくは文部省の行政指導のもとにあります。その文部省の博物館政策の一つ「科学系博物館ネットワーク推進事業」があり、1997年から「親しむ博物館づくり事業」として「ハンズ・オン」という言葉を初めて使った事業展開がなされています。

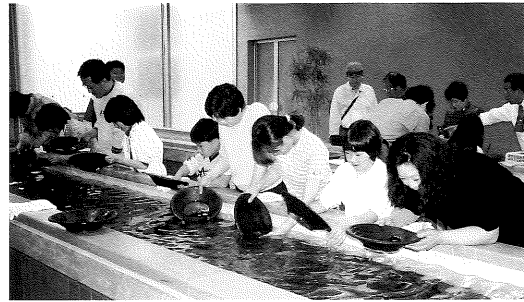
97年から8つの機関が文部省の委託をうけ3年にわたって、この事業を実施しましたが、今では31機関に及んでいます。学校教育では長い間の研究と実績の積み上げがありますが、これからは博物館も、こうした事業をつうじ学習活動をより積極的に模索していこうとする方向です。

「ハンズ・オン」プランナーの染川香澄さんによりますと『博物館活動における「ハンズ・オン」とは、単に展示物や標本資料を見せるだけでなく、五感（触感・味覚・臭覚・聴覚・視覚）を使って、触ったり、遊んだり、試したり、操作したり、することによって、人々が驚き、楽しみ、なぜそうなるのかを考え、不思議に思う気持ちを持つこと、人の心の動きを誘発するような活動のこと』とっています。

前述の実施機関の主なものをみますと、旭川市博物館が「目指せ、子供学芸員」、前沢市立牛の博物館が「牛乳からバターを作ろう」、神奈川県立命の星・地球博物館が「私はヘッピー虫よ」、神奈川県立金沢文庫が「金沢の歴史と古道を学ぶ子供探検隊」、岐阜博物館が「見て、触れて、造って、楽しく学ぶ化石ウォッチング」、滋賀県立琵琶湖博物館が「漁具・漁法と魚の習性」、大阪府立近つ飛鳥博物館が

「古墳・飛鳥時代の衣装を着てみよう」などなどです。

当湯之奥金山博物館の展示をみますと、まず、飛鳥・奈良時代から伝統的に行われてきた比重選鉱による砂金採りを「砂金採り体験室」で体験できます。それに、視聴覚によって16～17世紀の金山操業期の歴史を伝える「映像シアター室」と「ジオラマ展示室」は、単なる一般的な展示手法と異なる方法を採用し、見る人に驚きと感動を与えています。



館内での砂金採り体験

事業の方も年一回の「湯之奥金山遺跡」の現地見学会や、特別展にあわせて開催した「玩具づくり教室」、さらに、この8月に予定されている「旧石器時代から縄文時代にかけての石器原石（チャンチャン石）を探し、石器を作ろう」、また、すでに2回開催し今後定期的に開催を計画している「親子映画観賞会」、また、夏休み自由研究に「金山史研究に挑戦」など、中学生以上の参加者を対象に学習の機会を提供する色々な行事が行われますが、これらは全てハンズ・オンを取り入れた博物館活動です。

今後は実際に鉱石を採ってきて、石臼など使って粉成（こなし）、比重選鉱で金を採り、灰吹法で吹金（純金）をつくる体験学習や、さらには下部川、常葉川などにおいて自然金（砂金）を「ゆり板」「ゆり盆」を使って採る体験学習も考えています。

このように当館では、ハンズ・オンの機会を今後とも提供していけそうです。平成14年（2002）から始まる小中学校の完全週5日制に対応できる湯之奥金山博物館として館の職員一同、今後がんばって参ります。

## 誌上博物館 — シリーズ その10 — 遺跡調査レポート

山梨と静岡の県境に位置する毛無山は、1,964mの標高を有し、「山梨百名山」にも選定されています。

天気の良い日には、山頂から富士山とその裾野が一望できる景色の素晴らしさには定評があり、5月の連休ころになると、一般の登山者も増え、登山愛好家の間でも一度は登ってみたい山の一つとしても数えられます。

その毛無山の山腹に湯之奥金山と総称される、中山・内山・茅小屋の3金山があり、また、中山については、黒川金山（塩山市）とともに、平成9年9月に国の史跡に指定された甲斐国屈指の金山跡です。

中山千軒ともいわれた中山村は、湯之奥金山の中心的鉱山村であり、永禄11年（1568）に穴山信君が中山郷へ物資流通を命じているように、金山の操業は戦国時代15、6世紀に最盛期を迎え、江戸時代中期18世紀に至るまで、（この頃になると細々ではあったが）産金が続けられたことが、平成元年から行われた3年間にわたる総合学術調査によって、明らかにされました。しかし、これ以降、大々的な調査は行われておらず、遺物・遺構に関しては現在のところ現状を保護する方向にあります。湯之奥金山博物館では年に一度、現地見学会として、一般参加者を募り、中山金山もしくは他金山の見学会を行っていますが、実際、現場に行くとならぬ自然の力も加わり、地形などの変化がみられます。調査の時、台風の通過により一夜にして金山沢に大きな変化があったこともあります。

湯之奥金山の案内などで現地に大きく関わっている地元知識経験者の石部典生氏の協力を得、今回、中山・茅小屋の現地に入りましたので、現場の状況報告を兼ねた金山の説明を進めていきます。

中山金山は、毛無山長尾尾根の1,400mから「地藏峠」西側の「金山沢」を経て中山尾根の標高1,650mにかけて約500m四方の広さにまたがります。尾根から南斜面には、泥岩層に挟まる石英の金鉱を露天掘した採掘坑77箇所、坑道16箇所の採鉱域がありますが、坑道は鉱脈を追った鑿押し掘りの間歩で、縦長で奥行き3m～45mあり、江戸時代の採掘と思

われます。金山沢周辺には石積みで半月形に平坦面を造成したテラス124箇所が分布しています。テラスの幾つかには名前がついていますが、登山道を登って一番最初に目につくのは、女郎屋敷跡と呼ばれるテラス。ここから少し先にある広めのテラスが大名屋敷跡と呼ばれるテラスです。また「七人塚」と呼ばれるテラスには、明暦3年銘の光背石塔が建っており、中山村にいた金山衆らを供養したものと考えられますが、「七人塚」と呼ばれながらも実際には石塔は2基しか存在しません。

調査時には、鉱山用挽き臼・磨り臼・搗き臼で鉱石を粉碎し、セリ板、フネなどを使って採金した磨り場やセリ場などのテラス、焼窯、金山衆らの建物跡、鉱石屑の捨て場とともに、鑿、斧、金鋏の鉱山用具・天目茶碗・茶壺など陶磁器、銅銭・煙管・基石などが出土しました。これらの出土品は、かつてここに暮らした金山衆をはじめとする、村人たちの生活の様子を伝える重要な資料として、博物館展示室に展示してあります。

今回、現地に行ったことで気付いた点がありましたが、それは、標高1,800m付近の地点に、露天掘りをしたのではないかと考えられる、すり鉢状の大きな窪地や、また、それを裏付けるかのように周辺の地面は一面赤茶けた石で覆われていたことです。

それらの石には水晶の結晶がはっきりと見て取られ、間違いなく、鉱石や、鉱石の廃滓である「ズリ」でした。つまり、これまで、中山村の集落範囲というのは1,400～1,650mとしてきましたが、実はさらに200m程高い位置である1,800m付近まで、その採鉱範囲、もしくは村自体が大きく広がっていたので



中山金山の鉱道

はないかということです。もちろん、もっとしっかりとした調査が必要で、安易にきめつけることはできませんが、可能性としては十分考えられることではないでしょうか。

茅小屋金山は、毛無山西側の中腹、入の沢に沿った標高850m付近にあります。南向きの沢筋に石積みで半月形の段状に造成された28箇所のテラスなどには、承応3年（1654）大田八左衛門銘の板碑型石塔をはじめ、石造物10点が建っています。しかし、調査時にはあったはずの石造物2点が紛失しており、非常に残念なことでした。

ここでは鉱石を焼いたと推定される石積みで、方形に組まれた窯跡も発見されていますが、組石の部分に磨り臼が半分に欠けた物が使用された箇所も見られました。茅小屋金山の採鉱域は不明で発掘調査

はされていませんが、石組の規模だけで見ると中山よりも大きく遺っているように感じられます。

江戸時代の古文書には「茅小屋村」と見え、ここにも金掘りたちの村が営まれていたと考えられますが、中山・内山の両金山と同様、17世紀後半には、金掘りたちは山を降り村は廃絶したと考えられています。（学芸員：小松美鈴）



茅小屋金山ズリ捨て場

## 館主催事業のお知らせ

### 1 君も石器づくりに挑戦

東海地方から中部地方にかけての、旧石器時代の遺跡から出土するナイフ形石器の石材が、町内を流れる常葉川が原産地であることが判明しました。

この石は、チャンチャン石と呼ばれるもので、常葉川からこの石を探し、指導者からナイフ形石器づくりを教わります。

### 2 中学生チャレンジ教室

#### （金山史徹底研究）

当館の映像、ジオラマ展示、実物展示により金山の歴史、金山衆の生活、採金技術を学ぶとともに、砂金採り体験を通じ、往時の産金方法をも学び、採った金で金箔づくりにチャレンジ。これらを通して研究テーマを作り、夏休み中の個人研究を指導します。

### 3 あつまれ金山探検隊

#### （湯之奥茅小屋金山遺跡見学会）

当館の映像、ジオラマ展示、実物展示と金山遺跡のレクチャーのあと、湯之奥金山を構成する茅小屋金山遺跡の現地を見学し、その姿を自分の目で確かめ、その歴史を紐解き、学術的価値を再認識し、鉱山史や金山に対する理解を深めるとともに、文化財の大切さについて考えていただきます。

期 日 平成12年7月27日(木) (雨天中止)  
定 員 中学生以上30人  
参 加 料 無料  
参加申込 7月22日までに当館へ  
集 合 午後1時、甲斐常葉駅前  
持 ち 物 長靴、筆記具、軍手、保護メガネ

期 日 平成12年8月10日(木)  
定 員 中学生40人  
参 加 料 1,000円 (観覧・体験料・資料代)  
参加申込 7月31日までに当館へ  
集 合 午後1時、当館多目的ホール  
持 ち 物 筆記具

期 日 平成12年9月3日(日) (雨天中止)  
定 員 小学生以上30人  
参 加 料 無料  
参加申込 8月29日までに当館へ  
集 合 午前8時30分、当館ロビー  
持 ち 物 弁当、飲料水、筆記具、雨具

## 活 動 報 告

### 第2回・3回特別展

当館は、平成12年4月1日付けで「資料館」から「博物館」へと名称変更しましたが、博物館ではその新たな区切りとして4月1日～6月11日までの約2箇月間、特別展を開催してきました。

ちなみに湯之奥金山博物館では年に何回かこうした「企画展」もしくは「特別展」を催していますが、「企画展」では主に金山や鉱山、またそれらに付随したものに係る展示であり、「特別展」は、それ以外のカテゴリーに属するものとしています。

今回の特別展は、都留市在住の奥隆行氏個人のコレクションを借り受けて展示公開したものです。

奥氏の所有する日本各地の郷土玩具のコレクションは、今やゆうに500点を超えるほどのもので、氏いわく「郷土玩具マニアというわけではなく、むしろ、旅行が好きでその道連れに購入していたものが次第に増えていってしまった」ということでした。

500点以上にもものぼる玩具を一度に公開することは無理が生じたこともあり、特別展は前期・後期の2度に分けて開催しました。

前期では金山もしくは金に結びついた展示ということで、4月1日～5月7日まで「郷土玩具～金の彩り～」として開催しました。

かつて、文化を作りはじめた人々は、様々な色を美しく感じるばかりでなく、「色」をより効果的に使い、色彩の配列や補色関係の法則を見つけて、「色」がもっている価値を複合的に組み合わせることを考えました。「色」自体に宗教や階級、帰属社会などを意味付け、より一層価値を見い出し、驚くほど多様な世界を生み出したように、社会が複雑さを増して人の意識が十分に拡大され始め、色彩に目を向けた人々にとって「色」は人の生活から切り離せない存在となりました。

例えば、古代の金工作品に鍍金や銷金で金彩、銀彩を施すことは、特権階級のステイタスとして特別視され、また色は美しく華やかなものほど喜ばれました。鑄造した仏像に鍍金してあるのは黄金色の仏像が尊いということのほか、現世ではない金色に輝く世界を展開している意識があったからです。

特に金は酸化せず黄金色がいつまでも続きます。永久不変が神秘と感じた人々は、金そのものに、「死」からのがれることのできない生き物の運命に対する長生への願望など、呪術的意味や宗教的色彩を付加し、現代に至るまで特別な存在になっていきました。金は鉱物であると同時に、色としての価値を十二分にもっているのです。

そういった意味を込めて、ほかの色彩の中でも、ひときわ特別視された「金」の色彩を使った約200点余の玩具を抽出し展示しました。

また、後期では5月13日～6月11日まで、主に動物をモチーフにした作品を公開しました。

十二支にも動物が当てはめられているように、動物は非常に親しみやすく身近な存在です。「動物民話」は、動物が主人公になっている民話ですが、その他の民話の中にも人間と動物の交流が描かれているものがいくつもあります。動物以外にも、竜神、雷神、鬼、河童、天狗など様々な神や妖怪、そして水の里や山奥の隠れ里など不思議な異郷が登場し、日本の民衆の豊かな想像力が息づいています。

玩具も、古来より伝わる民話とともに見てみると、また違った雰囲気を楽しんでもらえるのではないかとということで、「民話と玩具たち」というテーマで開催しました。



展示品の一部

どちらも約1箇月間づつの展示公開となりましたが、観覧無料ということもあり、来館した多くの皆さんに見ていただき、また多くの方から様々な感想の声を聞くことができました。

また、この特別展を記念して、6月10日（土）、博物館多目的ホールで、郷土玩具づくり教室を開催しました。作品は「でんでん太鼓」。今回は民芸作家の斎藤岳南先生に指導に当たっていただきました。

約30人の親子が参加し、和気あいあいとした雰囲気の中で進められ、小さな子ども、はさみや糊付けなど、意外と難しかったようで、お父さんやお母さんの手を借りながら一生懸命作っていました。

また、逆に大人の参加者の方が、普段あまりすることの少ない作業なだけに、夢中になってしまっている感じもありました。

約2時間の作業時間でしたが、みんな作り上げる

ことができ、でき上がった「でんでん太鼓」を満足そうに鳴らしながら帰っていきました。



## 公開講座のお知らせ

### 我が国の産金と金銀貨

…湯之奥金山の産金と貨幣を考える…

通算回	期 日	演 題	講 師 名
第16回	平成12年 10月21日(土)	近世：金貨の時代来たる	白梅学園短期大学 講師 西 脇 康
第17回	11月18日(土)	江戸時代の黄金・貨幣観	早稲田大学 教授 深 谷 克 巳
第18回	12月16日(土)	甲州金から慶長小判へ	兵庫埋蔵銭調査会 代表 永 井 久美男
第19回	平成13年 1月20日(土)	金銀銭貨の出土資料	出土銭貨研究会事務局 顧問 尾 上 実
第20回	2月17日(土)	生活の中の金貨 …江戸時代の価値に迫る…	千葉大学 講師 加 藤 貴

主 催 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館  
下部町教育委員会

会 場 湯之奥金山博物館多目的ホール（JR身延線下部温泉駅下車・徒歩約3分）

時 間 午後2時～午後4時

受講料 無料

その他 ◎ 博物館見学及び砂金採り体験希望者には割引券を用意いたします。

◎ 気象条件や講師の都合等により日程が変更される場合がありますので、その都度博物館へお問い合わせのうえ御来館ください。

## 編 集 後 記

梅雨明けした地域もありますが関東地方はもうしばらく、はっきりしないお天気が続きそうですね。でも、はじめした時期ももうすぐ終わり、いよいよ

よ暑い夏がやってきます。そろそろ夏休みの計画を立てる人もいると思いますが、この準備段階が意外と楽しいものです。

楽しいことを考えて、梅雨の湿った気分を吹き飛ばしてしましましょう。

博物館だより

第13号

平成12年6月30日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館  
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先  
TEL 0556 (36) 0015